学 位 論 文 内 容 の 要 旨

		要　　旨
学位申請者	山田真美 【ジェンダー学際研究専攻　平成２３年度生】	本論文は、第二次世界大戦中のオーストラリアのカウラ捕虜収容所で起きた大規模な日本兵捕虜の暴動事件（通称カウラ事件）を、そこに参加した日本兵たちの「日常」という視点から再考察した研究である。捕虜になることは「恥」であり、むしろ死を選ぶべきであるとした当時の日本軍の教えも手伝って、この事件の存在や体験は語られることがなく、日本の戦史・近代史の中でもほとんど注目されてこなかった。著者の関心は、この事件がなぜ生じたのかとともに、この事件を起こした捕虜たちの日常を、身体、場所、物質性から具体的に検討することにより、この事件の意味を考察することにある。 研究の方法は、第二次世界大戦期に記録されたオーストラリアの公式文書、新聞記事、日本の戦記などに文献資料として依拠しつつ、主要部分は、筆者が長年にわたり実施した元日本兵へのインタビュー（1993～2004年）を用いている。 論文の構成は以下の通りである。序章では筆者のカウラ事件との関わりが紹介され、研究目的とライフヒストリーを含む研究方法が示される。第１章では、第二次世界大戦期の日本兵の身体が私的制裁を通じいかに軍隊化されたかに加え、日本の捕虜政策の変遷が論じられる。第２章ではオーストラリアの捕虜政策が語られる。第３章では、カウラ事件の死者たちのリストが複数のソースを通じて構築され、捕虜たちの身体をめぐる実像が明らかにされる。第４章では、カウラ捕虜収容所の日常が、元捕虜たちの語りによって具体的に示される。それは西洋式の衣類に身を包み、豊富な食事が与えられ、労働は強制されず、暇な時間は賭け事に興じるという、地獄のニューギニア戦線とは対照的な「天国」の生活だった。また女形を演じるなど身体をめぐるまなざしの変化も生じている。第５章では、カウラ事件の状況が回想を通じて再現され、第６章ではカウラ事件直後の様子が語られる。第７章では、カウラ事件後の捕虜たちの体験が、演劇や物づくりを通じて紹介される。第８章では、復員した元捕虜たちの戦後が、豪州カウラ会、マーチソン会の活動を通じて語られる。最後の結論では、カウララ暴動が、日本兵たちの極限の戦争体験という「非日常」の日常化から捕虜という「非日常」の日常化への転換という極度の落差による葛藤の中で生じたこと、また戦後も彼らは「元捕虜」という体験をそれぞれの中に抱え生き続けたこと、そして元捕虜たちの男同士のホモソーシャルな絆の維持が語られる。カウラ事件とは、きわめて固有で特殊な事件でありながら、戦争と軍隊、兵士と男性性、日本社会のい共同性の構造をめぐるさまざまな示唆をも与えてくれるものでもあった。
論 文 題 目	カウラ事件（1944年）の研究――捕虜の日々を生きた日本兵たちの「日常」からの再考察	
審 査 委 員	（主査）　熊谷圭知 教授	
	棚橋訓 教授	
	水野勲 教授	
	小林誠 教授	
	小風秀雅 教授	